

平成29年度第5回外洋常任委員会 議事録

日 時 : 平成30年1月11日(木) 18:30~20:00

場 所 : 株式会社トーヨーアサノ会議室

出席者 : (理事)

植松副会長、坂谷定生常務、菊池邦仁、平井昭光、平松隆、中澤信夫、
(委員会)

ルール委員会外洋規則小委員会委員長 大村雅一

国際委員会外洋小委員会委員長 鈴木一行

外洋計測委員会委員長 吉田豊

(外洋常任委員会事務局)

鈴木保夫

(順不同、敬称略) 計10名

1. 挨拶

植松: 今年もよろしくお願ひします。

2. 議題

1. JSAF 理事選挙における外洋艇推進グループ推薦候補者の選考について

植松: 私は今年度をもって副会長を辞任するととなった。

先日河野会長に次期外洋系の副会長の候補として3名の名を上げその中から推薦してもらえるようお願いをした。

副会長と常務が同時に交代するときの混乱を考慮し、坂谷さんには引き続き理事選挙に立候補していただけることになった。

選挙理事立候補者候補として、女性は作田さんと橘田さんの2名、男性は中澤さん、平松さん、坂谷さんの3名とさせていただきたい。

追加の候補者がいれば、団体長会議までに決めたい。

立候補の期間は、1月22日(月)からで、2月23日(金)が締切りとなる。

2. 平成30年度外洋艇推進グループ委員会別事業計画、収支予算について

坂谷: 事業計画及び予算は資料の通りである。

前年度と比較すると、今年度はNYYCの参加がないので、その分の収入と支出が減となっている。

大村: 2月24日の理事会で承認される予定。

3. ジャパンカップ委員会の設置と今後の進め方について

坂谷: 今後ジャパンカップは委員会を設置して国体のような形で開催したい。

委員会設置については前回の理事会で協議を行っているので、2月の理事会で承認される予定。

JSAF の組織的には資料の通り外洋艇推進グループに入る。

委員長の名前が空白であるが、植松副会長にお願いしたいと考えています。

委員会の委員を構成するにあたっては、外洋各専門委員会には協力していただきたいし、各加盟団体からも委員を出してもらいたいと考える。

委員会として責任を持ち、企画から運営まで独立してやってもらいたい。

趣意書を少し手直しして団体長会議に提示したい。

開催基準は 10 月 20 日に決めたものである。

11 月の第 1 週はインカレとぶつかっているが、日程は変更せず現地で調整する。

2018 年は、10 月 29 日（日）～11 月 4 日（日）で予定する。

レースは 11 月 1 日、2 日、3 日、4 日で行う予定。

大村：国体委員会では各委員会委員長が国体委員会の委員に名を連ねている。

坂谷：ジャパンカップ委員会でも各委員長が就任に賛同してもらえるとありがたいが、今後協議したい。

植松：クラス分けはおおまかに作っておき、公示で決定する。

4. オリンピックショーケースイベントについて

鈴木（一） 今までの活動の経緯は資料の通り。

12 月 22 日に大会組織委員会と競技した結果、3 月にハントが来日したときに方向性を出すことになった。

3 月までにできるところは詰めておき、ゴーになったら外洋団体に協力をお願いする。

KAZI から取材の要請を受けているが結果が出てからと考え控えている。

植松：開催ができなければそのときに考えることにして取材を受けたらどうか。

鈴木（一）：3 月に開催が決定してからでは遅いので取材を受けることにする。

5. オリンピック応援フラッグリレーの今後の進め方について

大村：オリパラ組織委員会の参画プロジェクトになったのでマークを入れた旗を作る。作成費用はあまりかからない。

坂谷：今年の予算で作成し、旗のサンプルの日の丸の部分を JSAF のロゴに置換える。

菊池：日本海側は外洋系が弱いので、水域理事の協力を仰ぐ。20 日（土）の代表者会議で説明する。

坂谷：代表者会議の議案にジャパンカップ開催基準とともに入れる。

6. ライフジャケットの義務化と JSAF の対応について

大村：ライフジャケット着用義務化の対象外については今まで説明してきたとおりである。

鈴木：現場で JSAF 主催のレース以外は対象外ではないことの説明で混乱しないように注意が必要である。

大村：着用義務化の対象外の主催する組織として「JSAF」と明記されているので問題はない。

5. 専門委員会報告

- ・吉田：座間味レースについて2月3日の合同会議で外洋沖縄と話すことになっている。
- ・鈴木（一）：今後ヨットの事故例をNOが吸い上げてWSに報告することになっていく。

自主的な報告を待っていても中々集まらないので、事故調査委員会のような組織が事故の責任には触れずに取材するのが良いと考える。

以上。

文責：鈴木保夫